

Special Support Education Research Center

SSERC 通信

(第11号 - 2008年12月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：藤原 義博
 〒112 - 0012 東京都文京区大塚 3 - 29 - 1
 TEL & FAX : 03 - 3942 - 6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>
 mail : sserc@human.tsukuba.ac.jp

巻頭言

「特別支援教育研究センターの一員として」

ひらひらと舞っている赤や黄色に色づいた木の葉をみて、特別支援教育研究センターに着任して1年余の年月が経ったことを改めて実感しています。

木の葉をみつめながら、この1年を振りかえってみると、センタースタッフである各附属特別支援学校の先生方に支えられながらの日々であったことを改めて感じています。刻々と変化していく時代の流れの中で特別支援教育研究センターが担うべく役割とはなにか、それぞれの附属特別支援学校の独自性を活かしながらどのように連携していったらよいのかなど、センターの設立意義はもちろんのこと、センタースタッフとして担うべき自分の役割について、自分の研究の範疇にとどまらない視点から模索していくことの重要性を確認した1年でした。また、身近に各附属特別支援学校の先生方がいらっしやるという環境の中で、子どもをみつめるまなざしや子どもたちとまっすぐに向き合う姿勢を学び、自らを振り返る良い機会となっています。

このような思いを巡らしていた最中に、奇しくも国際教育協力イニシアティブ事業の一環であるマレーシア訪問のチャンスをいただきました。マレーシア訪問を通して、特別支援教育への関心の高さと、青年海外協力隊員として現地で活動している方々の情熱を肌で感じ、その力強さと活気に圧倒されました。そして、日本の文化とは違う習慣や宗教、文化を背景とする国で自分のちっぽけさを感じました。日本の地を離れたことによって、自分が関係してきた聴覚障害教育の専門性とはなにかということに改めて考えさせられ、大きな宿題をマレーシアから持ち帰ることとなりました。

センターのスタッフとしてまだ1年、されど既に1年...、すぐに答えは得られない宿題ばかりですが、特別支援教育研究センターの意義を考えつつ、今後も真摯に向き合っていきたいと考えております。

左藤 敦子



講演とシンポジウム開催のお知らせ

「乳幼児期における障害の発見とフォローアップ体制の構築～感覚に障害のある乳幼児の支援～」と題して、講演とシンポジウムを開催いたします。乳幼児期における障害の発見とフォローアップ体制の現状を踏まえ、発見から支援までのシステムの構築および地域連携体制整備にむけた課題についてご参加の皆様と共有化を図り、実践に繋げることができればと企画したものです。「周産期医療とフォローアップ体制～障害のある赤ちゃんの発達を繋ぐ連携～」と題しての前東京女子医科大学母子総合医療センターの三科潤氏による講演の後、シンポジウムでは附属視覚・聴覚特別支援学校の乳幼児支援の実践や全国調査結果報告、地域支援システム構築についての報告等を行います。

日 時：平成21年1月10日(土) 13:30～17:30

場 所：筑波大学東京キャンパスG501教室

青年海外協力隊「派遣隊員ハンドブック」を作成しています

青年海外協力隊の隊員応募の流れ、赴任国派遣までの国内での研修、任地における職場での仕事、地域での仕事、仲間との連携、ワークショップなどの開催、帰国後の活動など、実際に経験してきた帰国隊員による具体的な話題を集めた「派遣隊員ハンドブック」を作成しています。ハンドブックは全国の特別支援学校と青年海外協力隊（JOCV）隊員の希望者に配布を予定しています。



「国際教育協カイニシアチブ」シンポジウムのお知らせ

文部科学省の委託を受け、独立行政法人国際協力機構（JICA）の協力のもと、平成18年度より、海外で活躍する現職教員派遣隊員への支援体制構築に取り組んできました。これまで、途上国へ派遣されている隊員が直面している自閉症児への対応の理解を図り、現地での活用等を目的とした自学教材DVDを作成しました。また、隊員の活動支援のための相談体制を基盤とした国際教育協カイニシアチブブログの開設、帰国隊員の知見をまとめた派遣隊員活動ハンドブックの作成やマレーシアにおける巡回支援モデルの展開などを行ってきました。シンポジウムでは、これまでの取組から得られた成果を総括するとともに、マレーシアにおいて展開してきた支援活動について報告いたします。多くの方のご参加をお待ちしております。

日 時：平成21年2月22日（土）10：00～12：30

場 所：筑波大学東京キャンパス G501教室

テーマ：「世界へはばたけ日本の力 障害児教育分野における青年海外協力派遣現職教員のサポート体制の構築」

参加費：無料

附属特別支援学校の研究協議会のお知らせ

各校の研究協議会の日時をお知らせします。他校の実践を知り、それぞれの専門性を活かした情報を交換・共有しあうことで、より一層の教育実践・研究の充実が図られることを期待します。詳細につきましては、各校ホームページをご参照ください。

附属視覚特別支援学校 「第6回 視覚障害教育研究協議会」

平成21年2月14日（土）、15日（日） <http://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/>

附属桐が丘特別支援学校「第37回 肢体不自由教育実践研究協議会」

平成21年2月5日（木）、6日（金） <http://www.kiri-s.tsukuba.ac.jp/xps/>

附属大塚特別支援学校 「第44回 知的障害児教育研究協議会」

平成21年2月13日（金） <http://www.otsuka-s.tsukuba.ac.jp/>

附属久里浜特別支援学校「平成20年度 自閉症教育実践研究協議会」

平成21年2月5日（木）、6日（金） <http://www.kurihama.tsukuba.ac.jp/>

【 現職教員研修 修了生の声『苦言・提言』 】

「聞く」ということ

原稿依頼が 9 月の終わりにきました。この原稿を書くにあたり、ちょうどこの季節から附属聾学校で授業分析をさせていただき、検証をし、レポートをまとめはじめていたことを思い出します。



子どもへのかかわり 研修に入る前と終えてからは、子どもへのかかわりが変わったように感じています。研修を受ける前のかかわりは、「表出」ばかりを気にして求めていました。活動案（指導案）からも、子どもの「表出」を誘うことの記述が多くありました。

何が違うのかな？ 附属聾学校で生活を送り、先生方の話を伺うと違いが見えてきました。子どもが理解できたか、聞こうとしていたかということ大切にしていました。理解できた時には、動きも活発になり、より楽しく活動ができることがわかりました。「表出」ではなく、その前に「受容（聞くこと・聞こうとすること）」を大事にすることを学びました。

「話し合い」ではなく「聞き合い」のすすめ ある講演で親子のかかわり方について、「聞く」ということについて触れていました。「話し合い」となると自己主張の場になってしまい、互いにぶつかりあってしまう。「聞き合い」をすると相手を理解し、認めようとするができる。立場は違いますが、教師は気が付くと待てず、「聞く」ことを忘れてしまいます。教師自ら聞こうとする姿を示していくことも大事だと思いました。

「聞く」ということ 息子が所属するリトルリーグの監督は、話を聞こうとしない子どもに「話は目で聞きなさい」と諭しています。話し手を見て、わかっていくことをすすめています。場面は違いますが、「聞く」ことの大事さを改めて感じました。

（平成 17 年度 研修生 千葉県立千葉聾学校 吉田正巳）

巻末言

先月、ある特別支援学校の研修会へ参加し、そこで高等部の授業を見させていただきました。ちょうど文化祭のステージ練習をしていて、一人ひとりがスポットライトを浴び、得意なこと、これまでの学習でがんばったことを発表していました。ある生徒は大きな声で台詞を言い、ある生徒は軽やかにダンスを、またある生徒はピアノ演奏を披露していました。それぞれがみな自信に満ちた表情で、とても輝いていました。そのとき校長先生が「あの子は、中学校で不登校だったんです、高等部へ進学してからも、しばらくは登校できなかったんですよ」と教えてくれました。一人ひとりの発表を多くの先生方が見守り、やりきった後に拍手喝采と声援を贈っていました。「それでいいんだよ！よくできているよ！」という言葉ではないメッセージが離れて見ている私にも十二分に伝わってきました。

苦戦している子ども達と真剣に向き合い、その子の持っている良さを引き出し、その良いところを心から認めている先生方の実践。生き生きと活動している子ども達。この出会いが彼らの人生にどのような響きを奏するのであろうと、胸に込み上がるものを感じながら、しばらくステージを見つめていました。（畠）